

千歳恵庭岳におけるオリンピックピックの記憶

札幌オリンピックピック滑降競技周辺史

守 屋 憲 治

千歳市史編集委員会専門部員

一九七二（S 47）年二月三日から十三日までの間、札幌と千歳においてアジアで初の冬季オリンピック大会が開催された。1972年第11回オリンピック冬季競技大会（札幌オリンピック冬季大会）である。

札幌ではオリンピックと四月の政令指定都市施行に向け、前年の末に大通の下に道内初の地下街オーロラタウン、ポールタウンができ、高速電車（地下鉄）が真駒内・北24条間に走り始めた。町ができる美しい町が・・・生まれかわるサッポロの地に”とトワ・エ・モワが歌うオリンピックのテーマソング「虹と雪のバラード」が溢れるようにまちに流れた。

開会式が行われた真駒内スピードスケート競技場において清楚な白いコースチュームに身を包んだ聖火ランナーのスケートイング姿が今も脳裏に残る。競技では宮の森の国旗掲揚塔三本全てに日章旗を翻翻と翻させた「日の丸飛行隊」カミソリ金野、ベテラン青地、エース笠谷の飛翔が昨日のことのようだ。また、「札幌の恋人」と呼ばれたジャネット・リンのそばかすの笑顔も思い出される。

二〇〇五（H 17）年には大倉山ジャンプ競技場正面に「虹と雪のバラード」の歌碑が設置された。歌碑は詩人であり札幌医大の整形外科医だった河邨文一郎の筆を陰刻したものだ。「虹と雪のバラード」は発表から四〇

年を経た今も札幌を代表する愛唱歌として頻繁に耳にする。

アルペンスキー競技の精華は最高速度が一五〇キに及ぶというダウンヒル（滑降）である。支笏湖北岸の雄峰恵庭岳（一二二〇メートル / e - en - iwa 頭・尖った・岩山）では湖に飛び込むような急峻なコースで戦いが繰り広げられた。今、支笏湖温泉街から見る恵庭岳は何事もなかったように聳えている。恵庭岳におけるオリンピック滑降競技の周辺において記録として残すべき事柄を周辺史としてまとめてみたい。なお、恵庭岳は山頂部を含めた南斜面が千歳市域である。

（年表記はオリンピック名に西暦が冠されることから通算に便利なように本稿に限り西暦とした。「〇〇年第〇回オリンピック」は算用数字とした）

幻の札幌オリンピック

戦前の一九四〇（S 15）年にアジア初の夏季オリンピックとして開催される予定であった第12回オリンピック夏季東京大会に合わせ、第五回となるアジア初のオリンピック冬季大会が札幌で開催されることが決定していたことを知る人は少ない。戦前、オリンピック冬季大会はオリンピック憲章によつて夏季開催国がその権利を有していた（さらに一九九二（H 4）年までは夏と冬のオリンピックは同年開催だった）。

オリンピック東京大会の目的は、一九四〇（S 15）年が神話として伝わる神武天皇の大和平定と橿原宮かしはらのみやでの即位二六〇〇年を記念する「紀元二千六百年」にあたつてのことの記念事業とすること、一九三三（T 12）年九月に発生した関東大震災からの帝都復興を世界にアピールすることにあった。また、東京月島では日本万国博覧会が計画され、省線（↓国電↓JR線）有楽町から銀座4丁目を経て会場に直行するため築造されたのが隅田川に架かる晴海通の跳開橋からどき橋＝勝鬨橋である。

『新札幌市史』によると札幌オリンピック冬季大会は「昭和十五年二月三日から十四日までとされ、ボブスレーのコースを神社山、スケート競技場を中島公園、回転競技は三角山、滑降競技は手稲山、ジャンプは大倉山、シャンツェ、選手宿舎は新設予定の小学校、・・・」とある。また、一九六一（S36）年発行『一九六八年オリンピック冬季大会札幌招致の追加資料』には「（一九四〇年）第五回冬季オリンピック大会札幌開催の競技施設として準備したのは次のとおりである。2スキー競技場 D滑降競技（新設）手稲山 標高差230米／平均斜度10度／距離5杆」とあり、滑降競技会場は手稲山だったことがわかる。

東京大会の決定は一九三六（S11）年七月に開催されたベルリンでの国際オリンピック委員会（IOC）総会で、札幌大会は一九三七年六月開催のワルソー（ワルシャワ）総会で決定された。

しかし、札幌決定の一カ月後の七月七日、一九〇〇（M33）年に起った北清事変（義和団の乱）後の議定書に基づき米英仏伊などの列強国軍と同様に北京郊外永定河盧溝橋付近に駐屯していた日本の支那駐屯軍に対して何者かが発砲したことで軍事衝突が発生した。盧溝橋事件である。その後、戦火の拡大に伴い事件は北支事変、支那事変と名を変えた（戦後は中華民国の略称から「日華事変」、さらに実態から「日中戦争」と変化した）。一九三八（S13）年四月には国家総動員法が公布され、議会の承認なしに物資や労働力を動員できる戦時体制となっていた。

盧溝橋から一年後の一九三八年七月十五日、政府はオリンピック開催の返上を通達、翌日には開催中止、大会返上が決まり札幌オリンピックは幻となった。

その後の幻についても簡単に記しておきたい。

二度目は一九六四（S39）年のオリンピック夏季大会を東京に招致しよ

うとする動きが中央で盛り上がり、一九六四年オリンピック冬季大会を札幌に招致しようと一九五七（S32）年三月に札幌市議会において意見書を可決した。全道一丸となって招致に努めたが東京大会のみ決定した。一九六四年第9回オリンピック冬季大会はオーストリアのインスブルック開催となった。

さらに、一九六四（S39）年には一九六八年開催の第10回オリンピック冬季大会誘招致にあたって札幌は仏のグルノーブルに敗れた。

滑降競技場の選定

オリンピックは開催都市で全ての競技が繰り広げられるという前提がある。札幌オリンピック冬季大会では、スケートが真駒内屋内・屋外競技場、月寒体育館、美香保体育館、スキージャンプは大倉山と宮の森で、アルペンスキーの回転、大回転とそり競技は手稲山（一〇二三・一）と、札幌市内を主に開催された。

滑降はアルペンスキーで最も難しく勇気と忍耐力と鋭い反射神経、そして技術が要求される。スタートからフィニッシュまで二分前後で複雑なコースと斜度をスピードの最大の敵である風圧を避け、クローチングフォームで滑り降りる競技である。その滑降競技だけが開催都市である札幌ではなく、千歳の恵庭岳で開催された理由は何だったのだろうか。

札幌市内と近郊には手稲山のほか、一五〇〇級の余市岳、無意根山、一四〇〇級の級の中岳、一三〇〇級の恵庭岳、漁岳、白井岳、狭薄山、札幌岳、朝里岳などの山々がある。しかし、その中で急峻で滑降競技規定に定められたコースの標高差と斜度を確保できるのは、エゾマツ、トドマツの原生林が広がる恵庭岳がただ一つの山であった。恵庭岳は当時、支笏洞爺国立公園の特別地域に指定されていた（現在は第二種特別地域である

が当時は地種区分が未定であった)。

一九六五(S40)年五月七日、札幌ローヤルホテルでオリンピック冬季大会札幌招致委員会設立総会が開催された。当日、配布された設立総会関係資料集に「(1972(S47)年)第11回オリンピック冬季大会札幌招致申請書」がある。申請書・I計画書・4施設には「既にある施設を改修または拡充し、さらに必要な施設を新設する。(前回の1968年第10回オリンピック冬季競技大会招致に際しての計画と概ね同じ)」とし、表中に「施設名・滑降コース 場所・恵庭岳 標高・1200m オリンピック村からの所要時間・40分 規模・男子用1、女子用1、リフト付」とある。摘要欄は空欄で、手稲山アルペン競技会場摘要欄・手稲山回転コースⅡコース敷地は39年末に造成済・とは違い、恵庭岳滑降コースは未整備を表していた。

4施設の恵庭岳滑降コース摘要欄の空欄Ⅱ回オリンピック冬季競技大会招致に際して、どこを滑降コースとして予定していたのかを道立図書館所蔵史料で確認した。

一九六一(S36)年十月札幌市発行『1968年オリンピック冬季大会札幌招致の追加資料』の付図(「札幌市内道路図」「札幌近郊主幹道路図」「1968年第10回オリンピック冬季大会札幌会場全体図」・これら地図に見るアルペン会場は手稲山)には恵庭岳を特定できるものはなく、招致委員会名簿には手稲町長名があるものの千歳市長の名はなかった。史料からは第10回オリンピック冬季大会を招致するにあつては滑降競技の会場として恵庭岳を選定していたことは窺えなかった。

しかし、一九六五(S40)年発行の対IOC回答書添付資料Ⅱ招致用技術関係パンフレット(和文)である『SAPPORO(第11回オリンピック冬季大会開催地に立候補している札幌の計画)』には、「(恵庭岳南西斜面

のコースは)1961(S36)年4月にFIS滑降回転競技委員長フリードル・ウオルフガンク氏によって、視察調査され、設定された」と記述され、恵庭岳全貌写真、地形図、縦断面図の欄がある(FISⅡ国際スキー連盟)。

また、一九六三年六月十九日開催の『第10回オリンピック冬季大会札幌招致委員会第2回総会資料』によると、七月には在日外国通信社支社長らを招待して北海道旅行の計画が報告された。計画によると、七月四日には千歳飛行場から支笏湖畔を経由、北海道炭礦汽船(北炭)系支笏湖観光運輸の客船でオコタン温泉支笏湖グランドホテル(北炭系北海道不動産経営(後・三井観光開発・現・グランビスタホテル&リゾート)・60開業↓61別館建設↓83休業↓92廃業)に宿泊、翌日は札幌市内の競技場と選手村予定地を視察し札幌グランドホテル泊、三日目には希望によりゴルフ、近郊の名勝負学を行う予定とされた。オコタン温泉投宿の目的は書かれてはいない。しかし、二日目の予定から滑降競技コースの設定が予定される恵庭岳南西斜面の視察が容易に推察でき、札幌招致委員会は当初から滑降競技は恵庭岳ありきということが窺えるのであつた。

ウオルフガングのコース設定と『1968年オリンピック冬季大会札幌招致の追加資料(付図)』に整合性を見出すことができない理由は何なのだろうか。



写真1 支笏湖グランドホテル本館
湖畔から定期船でグランドホテル着桟まで1時間10分、ホテルは豪華な別荘風の美しさを湖に写していた

札幌は一九六四（S39）年一月二十九日、1968年第10回オリンピック冬季大会誘致にあたって仏のグルノーブルに敗れたが、一カ月後の十二月市議会に再度、冬季大会招致を上程、当該議案を二十三日に可決した（グルノーブルオリンピック冬季大会は、記録映画「白い恋人たち」Ⅱ監督クロード・ルルーシュ、音楽フランシス・レイで知られる）。

年が明けた一九六五（S40）年一月十一日、札幌招致委員会は第11回オリンピック冬季大会誘致申請書をJOC（日本オリンピック委員会）に出し、二十七日に申請が承認された。この間、十月中旬にIOC委員、FIS会長のM・ホドラーによる札幌視察が実施された。

いずれにしても一九六一（S36）年四月のウォルフガングの現地調査以降、滑降競技は急峻なコース設定が可能である恵庭岳という暗黙の了解事項は、国立公園特別地域内における風致維持規制にもかかわらず公然のものとなった。なお、札幌が開催地として決定したのは、一九六六年四月二十六日にローマで開催された第六回IOC総会の第一回投票である。

設立総会関係資料集「委員名簿案」道内関係市町村等欄においては、千歳市長、手稲町長、恵庭町長が北海道市長会、北海道町村会の前に名を連ねていた。千歳市は恵庭岳滑降競技会場、手稲町（67札幌市編入、72西区、89手稲区）は手稲山回転・大回転競技、そり競技会場の所在である。

恵庭町（70市制）は道道札幌支笏湖線（67開通）で真駒内から滑降競技会場へ至る通過自治体であった。『恵庭市史』は札幌オリンピック冬季大会について、「恵庭市史年表」で「一九七二年一月二十九日、冬季オリンピック聖火リレー通過」とのみ触れている。

滑降競技場の決定

一九六五（S40）年作成『SAPPORO（第11回オリンピック冬季大会開

催地に立候補している札幌の計画』に恵庭岳滑降競技コースの概要が初出する。

競技の施設 （略）最も遠いもので約30km内にあり大会の運営に非常に便利

である。オリンピック村から各競技場までの距離は次の通りで

ある。滑降コース（恵庭岳）30km。

男子滑降競技コースの概略（恵庭岳第2峰）

技術的資料

出発点標高 1200m 距離 3100m

決勝点標高 320m 標高差 880m

出発点は恵庭岳の第2峰にある第1リフトの上の駅に設けられる。（略）このコースはまず南に面している急な斜面をS形カーブで標高850メートルのところまで降りる。そこから、南西面に伸びている起伏のある広い広野をS字カーブで横切り次いでコースはE3（リフト）に沿って走っている。チェアリフトケーブルが支笏湖に向かって30度28分の傾斜のある鋭い斜面を通過して真直ぐ降りる。このコースは70mの幅で伐採される、そうして回転の位置は、そのコースとスピードに応じて凹部に置かれ、選手を危険から保護している。

女子滑降コースの概略（恵庭岳）

技術的資料

出発点標高 1000m 距離 2680m

決勝点標高 320m 標高差 680m

出発点はE1リフトの上から約200m横の降りたところにある平行線の山の道を行けば着く（要約）。コースはまず南西に向かいS形カーブを通り、海拔約708・5mの平原の下まで、うねっている中腹をとる。そこから支笏湖に向かって30度28分の急な斜面を降り決勝線に入る。女子コースの危険を排除するため特別な安全手段がとられる。それには70mの幅によく伐採され

たコースを作り、そのコースから余計な障害を取り除く。

この恵庭岳南西斜面のコースは、一九六一（S36）年四月にFIS滑降回転競技委員長のウオルフガングによって設定されたことは前述した。ウオルフガング来道の目的は1968年オリンピック冬季大会札幌招致に向けての滑降コースの選定要請にあった。この時、北海道スキー連盟関係者は手稲山と戦前から東洋のサンモリッツと謳われたニセコアンヌプリ（一三〇八）のニセコ比羅夫スキー場（現・ニセコグラン・ヒラフスキー場）を推したところウオルフガングは「滑降コースは恵庭岳しかない」と最後まで首を縦に振らなかったという逸聞があるという。また、ニセコ山系はガスの発生など気象条件が悪いともいわれた。

恵庭岳を含む支笏湖地区は一九四九（S24）年五月十六日に国立公園に指定されていたが滑降会場としては恵庭岳ありき、国家的事業という大義名分と錦の御旗があるならばある程度のことば許されるといった考えがオリンピック冬季大会札幌招致関係者であったのであろうか。この当時、日本においては自然保護意識が未だ醸成されていなかった。我が国において自然環境の保護などを所掌の一部とする厚生省から、環境問題専門の役所である環境庁が独立したのは一九七一（S46）年、省への昇格は二〇〇一（H13）年のことであった。

一九六六（S41）年七月二十六日、札幌オリンピック冬季大会組織委員会（組織委員会）が発足した。九月五日に初めての関連施設専門委員会スキー小委員会が東京で開催され、恵庭岳滑降コースが検討された。小委員会は、二十日には恵庭岳、大倉山などを視察後、札幌グランドホテルへ移動して滑降会場は恵庭岳と内定した。

千歳市は、恵庭岳においての滑降競技実施が千歳空港の国際化、支笏湖振興のため丸駒温泉・奥潭（おくたんオコタン）間道路新設などによる支笏湖岸一

周道路の整備に期待が高まったが、八月三十一日の『毎日新聞』朝刊に載った恵庭岳滑降コース変更の記事に慌てた（記事要旨）。

現地調査のうえ結論 恵庭岳滑降コース

大崎厚生省国立公園局長は「組織委としてまだ基本的なコースの設立や施設計画など正式決定していないので、いまのところなにもいえない」と次のように考えを明らかにした。

木原全日本スキー連盟会長から現在の予定コース以外に好条件のところはないので、ぜひ認可してほしいとの話があったが、厚生省としては同地区の標高、地形、距離などの調査や付帯施設をどのような場所に設定するかなどの具体案がはつきりしなければ判断できない。

このようななか、十月七日の第三回組織委員会滑降競技の会場を恵庭岳とし、厚生省と折衝することと諸般の調査を行うことが決まった。

十月二十六日開催の第二回札幌オリンピック冬季大会準備推進連絡会議で配布された資料の隅に「場所は決定したが国立公園である為、厚生省と折衝11月1日に決定の予定」と出席した東峯元次のメモがある。準備推進連絡会議は在札幌官庁で構成され、東峯は千歳市から参加した助役（75（S50）〜87千歳市長／75↓東峯）だった。

第二回準備推進連絡会議配布資料（第一回（九月九日）議事録）にも

○滑降コース

厚生省から、自然保護の見地から恵庭岳の使用について、ストップがかかったが、その後、木原全日本スキー連盟会長が厚生省と話し合い、その使用についての手続きを進めており、目下順調に取進んでいる。

と、競技場設置予定地について報告がされている。

第二回準備推進連絡会議においても恵庭岳については、厚生省と折衝することが報告されるにとどまった。質疑応答で東峯助役は積極的な折衝を

迫った。

東峯千歳市助役 千歳市として重大な関心を持っているのは恵庭岳（男女滑降に使用）で、さきほど河村組織委副参事よりの報告で、恵庭岳に決定されたが国立公園であるがために使用問題について厚生省と折衝していると拝聴したが、積極的な折衝を願いたい。

河村組織委副参事 恵庭岳の件については、過日中央で国立公園の審議会が行われ、上村組織委員長、武田同副会長、佐藤同事務局長が出席され種々説明がなされたが、その詳しい報告内容についてはまだ聞いていない。十一月一日東京で行われる競技及び専門委においてこれらのことがはっきりすると思われるので、その後において報告できると思います。

東峯の発言から、千歳が国立公園所在都市であつてもオリンピックを機に支笏湖の観光地としての地位向上を目論み、恵庭岳における滑降競技実施に大きな期待を持っていたことが窺える。

自然保護の観点から恵庭岳の開発ストップという厚生省の意向が示されていたが、北海道営林局では下草除去の除草剤を試験的に散布するなどコース設営の準備は進んでいた。

十月二十七日からの三日間、FISアルペンコース小委員会委員長等による大倉山、手稲山、恵庭岳などの視察があり、年明けの一九六七（S42）年一月からは北海道大学山岳部の協力を得て男女滑降コースの気象観測が開始された。

一九六七年一月に発行された組織委員会の活動状況を掲載した会報『札幌冬季オリンピック』第一号の表紙は、厳冬の支笏湖に浮かぶ急峻な恵庭岳のカラー写真であつた。未だ、厚生省の許可が下りないなか、組織委員会会報初号の表紙に恵庭岳を採用したのはオリンピックは国家的事業であるとの意識の表れか。

三月八日から十四日までの間、FISアルペンコース小委員会委員長等が恵庭岳、手稲山の競技場予定地を踏査し、恵庭岳では男女滑降競技コースのスタート、センターライン、フィニッシュを設定した。厚生省の許可は形だけのものになりつつあつた。

苦小牧スピードスケート競技場

札幌オリンピック冬季大会苦小牧スピードスケート競技場は苦小牧市ハイルンドスポーツセンター屋外リンクとして知られる。

当初スピードスケート補助競技場（練習用リンク）は真駒内に建設される予定であつたが、開会式が予定される真駒内スピードスケート場の隣接ではオリンピック後に撤去されてしまうことから、選手村から一時間交通距離圏内に新設となつた。

練習用リンク誘致には千歳、苦小牧、小樽が立候補した。建設主体は決定した市になる施設であつた。千歳は可能な限り国費で願いたいと要望していたが、苦小牧が熱心で市長、市議会議長がスケート小委員会に出席、誘致の陳情書を提出した。苦小牧には氷都としての意地があつた。

一九六六（S41）年十月十七日に地元選出の国会議員のバックアップもあり練習用リンクは札幌からの道路を改修することを条件に苦小牧に内定し、十二月二十日開催の組織委員会第四回実行委員会で苦小牧と決定した。

苦小牧は当初、緑ヶ丘公園西方の金太郎の沢（91く金太郎の池）付近を候補地に考えていたが一九六七年になってオリンピック施設委員会は現地調査の結果、火葬場と墓地があるオテーネ（湿地の意）の山間を適地とした。

練習用リンクは一九六七年四月十六日に起工、墓地を移転、陸自第七師団第七施設大隊が四月から八月にかけスクレーパー四台、ブルドーザー二台を駆使する部外工事を実施、札幌オリンピック競技施設第一号として

十二月十日にオープンした。総工費二億五千万円、このうち国庫補助が九千万円、残りを苦小牧と道が折半して負担した。

リンクは一周四〇〇呎、幅一五呎、北海道初の屋外パイピングリンクで日本選手の強化に使用されたほか、市民にも開放された。

一九六八年秋には加山雄三主演の『フレッシュマン若大将』のロケ地となり、一九六九年の正月映画として公開された。マドンナ役は酒井和歌子、苦小牧での上映は王子娯楽場だった。練習用リンクは筆者の実家に近く、高校二年の冬に滑走に行ったことが思い出される。

滑降競技場の建設

滑降競技会場の建設は自然保護に逆行すると北海道自然保護協会が反対、厚生省国立公園局も同様の考えから難色を示していた。このようななか、一九六七（S42）年三月十五日に開催された厚生大臣の諮問機関である自然公園審議会の管理・計画総合部会に対して組織委員会が、自然保護の観点から大会終了後には施設を撤去することを恵庭岳使用の条件とするのを申し入れた。審議会は非公式ながら、この条件を呑んだ。



写真2 恵庭岳滑降競技場起工式ゲート
ゲートは安全索道、三菱電機、岩倉組が提供したオコタンベ川仮橋の位置は大きなコンクリートの橋台が残る

恵庭岳の競技会場施設は仮設とすることが、三月二十八日に開催された第五回組織委員会です承された。

一九六八年七月四日、支笏洞爺国立公園特別地域内（林野庁

所管国有林）恵庭岳の原始林を伐採し、オリンピック滑降競技場とするこの許可が厚生大臣から下りた。厚生大臣の許可条件として「大会終了後は、施設を撤去するとともに、伐採跡地には、早急に従来の林相を回復し得るような方法で植林すること」とされたが、これは一九六六年に北海道自然保護協会が厚生省に提出した要望書『恵庭岳南西斜面におけるオリンピック施設計画について』の提言に沿うものだった。

八月二十四日に千歳の市民会館（現・教委庁舎）で「恵庭岳を中心としたオリンピック関係者打合せ」においても札幌営林局の計画課長補佐と管理課長補佐は①土地所有者として関心を持っているのは木の伐採であり、原則として予定を変更しないようにしてもらいたい②国土保全のため測量、予算措置は充分にしてもらいたい③各施設間の道路は営林署の既設道路利用で計画を進めてほしい④自然景観を阻害しないようにしてもらいたい など、林野の保護を訴えた。組織委員会総務課長は、施設担当も留意するが、後日開催される施設専門委員会には営林局長が出席する予定なので国有林野の保護について充分に発言してほしいと応じた。

九月十九日、秋晴れのなか日章旗とオリンピック旗を翻らせた女子滑降コースフィニッシュ地点で恵庭岳滑降競技場の起工式が行われた。起工式には灘尾文部大臣、竹田組織委員会副会長、西田信一組織委員（苦小牧、70札幌オリンピック担当大臣）、米田忠雄千歳市長など一五〇余人が出席、神式に則って厳かに執り行われた。二十日付『千歳民報』に当日の様子をみてみたい。

五輪旗のもと起工式 雄大な景色の男女コース
（略）コース建設工事は、本年六月から岩倉組の手で進められセンターラインを中心に三、四十呎幅の立ち木伐採は終わっている。きられたエゾ、トド松、カバ、シナは六千六百本（二千二百立方呎）で必要最小限にとどめ、自然

保護につとめたという。(略)施設はすべてオリンピック前年の四十六年秋に完成する。建設主体は組織委員会、事業費総額は七億四千万円といわれる。

(略)

組織委の第一号 竹田副会長喜びを語る

(略) 恵庭岳競技場は、世界に例のない雄大なコースだが、それだけに大自然が相手でありできるだけ自然を保護するということもあり難工事なる工事を担当するものには苦勞が多いと思うが、計画どおり完成を急いでほしい。

(略)

東京大会以上の成功を 灘尾文相の祝辞

(略) 恵庭岳は滑降としては、まれにみる風光明媚なところに建設されるが各国の役員、選手もきつとらやましがることだろう。期待どおりの立派な競技場を完成させ、東京大会にまさる成功をおさめてもらいたい。

三八度の急斜面も 競技施設の全体計画

(略) 恵庭岳滑降競技場の施設概要は次のとおり。

▽男子滑降コース(四十四年秋完成予定) 全長二千六百^{メートル}、平均斜度十七度、幅員平均四十^{メートル}。

▽女子滑降コース(同) 全長二千百^{メートル}、平均斜度十四度、幅員平均四十^{メートル}。

▽ロープウエー(四十四年十一月完成予定) 全長千八百^{メートル}。能力は、三十一人乗りゴンドラ四台で、毎時三百三十人を輸送する。秒速五^{メートル}。

▽リフト(同) 全長三百八十四^{メートル}、チェア式で一人乗り、毎時五百十四人の輸送能力を持つ。

コースはいずれもうっそうとした原始林の中をかけるが、最高三十八度という急斜面を含んでいる超国際級。(略)

この年は北海道百年という意義深いときだった。九月二日には昭和天皇ご夫妻のご臨席を仰ぎ札幌円山競技場で記念式典が挙行された。野幌の天

然林を永久に保存することが決まり、開拓記念館(北海道博物館)と開拓の村(北海道明治村)、高さ百^{メートル}の記念塔の建設が始まった。また、地方(一四支庁)記念施設として石狩管内ではモラップに青年の家支笏湖青年研修センター(69完成、05廃止)が建設された。

恵庭岳へのルート(一)

札幌都心部・真駒内の選手村(現・五輪団地)からの道道札幌支笏湖線と盤尻からオコタンまでの市道支笏湖周辺道路、さらに日の目を見なかった恵庭岳山麓湖岸の丸駒オコタン道路など恵庭岳滑降競技場へのルートについてみてみたい。一般車両が通行できるものに限定し、林道・作業道、送電線・鉄道管理道路については略したい(支笏湖街道(藤の沢経由)、光竜鉱山恵庭停車場線(漁川沿) 〓省略)。

道道札幌支笏湖線(現・国道453号)

真駒内の選手村と恵庭岳滑降

競技会場を結んだのが道道512号札幌支笏湖線と道道78号支笏湖線である。道道512号札幌支笏湖線道路構想の始まりは一九四八(S23)年十一月十八日に千歳町から札幌土木現業所に提出された「支笏湖方面道路実地調査方お願いについて」と、翌年四月に札幌地方綜合開発協議会(札幌市・豊平・江別・琴似・石狩町、札幌・白石・手稲・篠路村)と千歳町が北海道知事と道議会議長に提出した請願書「支笏湖観光産業道路開設について請願」に端を発する。いずれの請願も支笏湖畔から明治前期に官営製材所器械所があった器械場(現・滝野地区)までの間三二^{キロ}に道路を開削し、札幌方面からの観光客を千歳市街経由ではなく短絡ルートで呼び込み国立公園支笏湖の振興に資することが目的であった。なお、支笏湖の国立公園指定は一九四九年五月十六日である。

請願は採択され道費による開削が一九五六(S31)年十一月に始まり、

一九五八年十一月一日に札幌、小樽方面との交点である石切山・丸駒間の道路が開通した。施工は南恵庭駐屯地の陸自第一施設群が部外工事として行った。丸駒温泉から湖畔までは船を利用しなければならなかったが、千歳市街を経由しない札幌への短絡ルートが出来上がった。しかし、翌年には豪雨による土砂災害で寸断され通行不能となってしまった。

一九六〇（S35）年四月一日には札幌・丸駒間四五^キが道道308号丸駒札幌線として道路認定された。線形については幌美内・盤尻間は既存道路を改良し、石山（常盤）までの間二五^キは新たなルートを開削、国立公園を含む自然環境に配慮し豪雪対策として片切り、片盛りとし谷側の開放に努め除雪に考慮した。石山・ポロピナイ間三三^キは一九六三年に着工、一九六五年四月一日には湖畔・ポロピナイ間七^キの湖畔道路（着工63・10後・支笏湖畔有料道路）工事区間を含め道道512号札幌支笏湖線と改称した。



写真3 支笏湖有料道路開通式
開通式は料金所で行われた。有料道路は当初は「支笏湖畔」ではなく「支笏湖」と冠していたのだろうか

工事はオリンピックを考慮した異例のスピードで一九六七（S42）年九月二十日に有料道路と同時開通、一九七〇年に全線が完成、オリンピック前年の一九七一年に全線の舗装が完了した（93・4↓国道453号）。紋別岳スカイライン構想もあつた支笏湖畔有料道路の完成によって、湖畔と札幌を結ぶ支笏湖観光産業道路当初構想の観光ルート

が具現化した。

一九六九（S44）年七月一日には、支笏湖観光運輸（支笏湖観光バス）と北海道中央バスが札幌・湖畔間に直通バスを走らせた。支笏湖観光バスの起点は札幌駅前（西武札幌↓駐車場）、支笏湖畔バスターミナルからは支笏湖グランドホテルと支笏内への便も設定された。

道道丸駒線（ポロピナイ・丸駒） 支笏湖畔有料道路が湖沿いに開通したのに伴いポロピナイ・丸駒間二・八^キが道道苦小牧支笏湖線として一九六七（S42）年九月に開通、これまで船便に頼っていた湖畔からポロピナイ、丸駒へも自動車での通行が可能になった。一九七二年二月四日に道道730号丸駒線として路線認定された。

市道支笏湖周辺道路↓道道支笏湖線（含・丸駒オコタン道路） 盤尻（道道512号交点）・オコタン・（支笏湖西岸）・美笛を結ぶ道道78号についてみてみたい。

オリンピック道路ではない丸山・（支笏湖南岸）・美笛・オコタン間は一九五八（S33）年から四年間をかけた苦小牧営林署木材輸送事業林道（支笏湖畔林道）として開削された。また、道道札幌支笏湖線から盤尻で分岐、オコタン・ペ湖を通り恵庭岳南西山麓オコタンを結ぶ九^キを千歳市道支笏湖周辺道路といった。

市道支笏湖周辺道路は一九六三（S38）年八月一日に北海道開発のため「開発道路」としての指定を受けオコタン側から工事に着手、翌年には道道側も着手した。一九六九年開通、一九七〇年完成予定で工事は進められた。路線の一部は国立公園特別保護地区にかかり、全線が国立公園と水源涵養保安林内にあつた。札幌都心部からオコタンまでは三六^キの距離であつた。

本路線は、林産資源開発、鉱業開発、産業開発、さらに観光と幅広い重

要な使命を以て開発道路に指定されたとされる。しかし、市道とはいえ経費には国費が充てられ施工は札幌開発建設部千歳出張所が担当、将来的に道路に格上げされることが約束されていた。つまり、一九七二年札幌オリンピックの決定を予想し暫定開通までの工事期間を勘案、一九六三（S38）年度から工事を開始しなければ、全日本冬季競技総合大会（70・2・8）15／プレオリンピック）、札幌国際冬季スポーツ大会（71・2・7）13（滑降5〜10）／プレオリンピック）、オリンピックと三カ年のスケジュールをこなせないことに理由があった。

市道支笏湖周辺道路の新設は、測量と設計の期間を考えると終点オコタンにある恵庭岳南西斜面が一九六一年四月にFIS滑降回転競技委員長ウォルフガングによって現地調査され、コースも設定されていた時期と完全に符合するのであった。滑降コース以外にあってもオリンピックありきで進んで行っていたことを物語るものであった。また、終点には北炭系の支笏湖ランドホテルがあり、北炭会長荻原吉太郎から自民党有力者へ道路建設の働きかけがあったともいう。

札幌オリンピックが決まった一九六六（S41）年から組織委員会関連施設専門委員会の道路小委員会の委員だった千歳の東峯助役は、国立公園特別地域となる丸駒・オコタン間の山腹七_キを開削して恵庭岳一周自動車道路を造る必要性をことあるごとに説いた。理由はオリンピック関連道路として丸駒・オコタン間を施工させ、オリンピック後の支笏湖観光の振興に供することにあった。また、丸駒オコタン道路は道道札幌支笏湖線改良と優先順位が入れ替わったが、内々に建設の方向にあったともいう。

十二月五日の道路小委員会に置いて基本方針一〇項目が決まった。道路整備はオリンピックに限定せず、将来を見越したものとした。丸駒・オコタン間を含む恵庭岳一周道路の新設と、札幌・滑降競技会場間の観客はバ

ス輸送とし、千歳・苫小牧・滑降競技会場間の道路を整備するとした。

しかし、一九六九（S44）年三月十五日開催の道路小委員会の席上、丸駒オコタン道路の断念が堂垣内尚弘委員長から通告された。理由は、北海道自然保護協会に対して道路開削について意見を求めたところ「予定地は珍しい針闊混^{しんかつと}漣の林相で開発は認め難く交通には船便を利用すべき」との考えが示され、町村金吾北海道知事も協会の意見を尊重するとのことであった（闊↓闊葉樹Ⅱ広葉樹）。丸駒・オコタン間の代替として市道支笏湖周辺道路を道道に昇格させ拡幅するという事になった。

町村知事が丸駒・オコタン間の道路建設案に異議を唱え見識の高さを示したことは、滑降競技コース跡と比較すると保全された自然は小さいが、忘れ難いものと今も評価される。結果、丸駒温泉の丸駒温泉旅館も盲腸線終点の秘湯を維持することとなった。

一九六九年十一月、三カ月後にプレプレオリンピックを控えた市道支笏湖周辺道路は九_キの二車線砂利道として開通した（表紙写真参照）。

しかし、盤尻・オコタン間はプレプレオリンピックを直前に控えた一九七〇（S45）年二月に大雪による雪崩が発生、落石の危険に晒されるなど交通が遮断され惨憺たる状況に見舞われた。しかし、三月三十一日には道道昇格の既定方針どおりにオリンピック遂行の重要路線として、支笏湖畔林道を加え路線認定され道道673号支笏湖線となった（94・10改番78号／97・11）オコタン・美笛間土砂崩れ通行止）。沿道にオコタンペ湖、支笏湖ランドホテルなどがあることからオリンピック終了後も国立公園支笏湖の観光振興に大いに役立つと期待された。

一九七〇年三月に盤尻・オコタン間は道道認定を受けたが、雪崩防止対策の改良工事をプレオリンピックまでに行わなければならないことで、危険区間五・五_キを三車線化にして落雪・落石・雪崩防止柵を設置するなどの

道路防災工事が秋から初冬にかけ施工された。

さらに、プレオリピック後の一九七一年には滑降競技会場への取付道路分岐の位置から札幌方向一・五^キを四車線化した。この拡幅措置は国立公園内のため駐車場の確保が難しいこと、自然破壊を最小限にとどめることへの善後策であった

筆者は一九七〇年の夏、道路拡幅工事に伴う測量の臨時補助作業員としてオコタンの現場にいた。恵庭岳周辺は発破の音が断続的に鳴り響き車両が砂埃を上げ走った。翌年の晩秋までに工事を終えなければならないという緊迫が見て取れた。

道道千歳支笏湖線（名称・支笏湖公園線（支笏湖公園・千歳）） 戦前において千歳から支笏湖畔に至るルートとしては、王子製紙苫小牧工場専用鉄道（山線／08開業）への乗車が一般的である（千歳最寄駅↑千歳（19開業／王子製紙千歳川第四発電所）、一般乗車↑22）。また、支笏湖を一周する歩道が完成したのは一九二〇（T9）年といわれているが、物資の輸送は専ら船に頼った。支笏湖畔から丸駒温泉までは約九^キ、美笛川口までは約一六^キ、オコタンまでは約一五^キの水程であった。

明治中期に開削されたと思われる千歳から孵化場までの蘭越道路と一九三七（S12）年に千歳から支笏湖畔へ北海道鉄道がバスを走らせた烏柵舞道路（孵化場・支笏湖畔↑33開削／うち孵化場・上千歳↑20開削）は千歳支笏湖街道と呼ばれ、一九三八年九月二十八日には地方費道に昇格した。千歳支笏湖線は一九五四（S29）年三月三十日に道道37号支笏湖公園線として路線認定、一九六六（S41）年八月に全線舗装、一九九四（H6）年十月に16号に改番した。

なお、北海道中央バスは一九五一（S26）年六月から札幌（千歳市街）湖畔にバスを走らせた。

国道276号（苫小牧・支笏湖） 苫小牧から支笏湖にいたる道路は一九五〇（S25）年八月二十四日に国費に拠った市道支笏湖産業道路として

開通した。開通の翌日から苫小牧市営バス支笏湖線が運行、翌年五月十日には山線が廃止された。一九五四年三月三十日には道道68号苫小牧支笏湖線に昇格し一九六八（S43）年に舗装された。一九七〇年四月には道道四路線とともに俱知安・苫小牧間の国道276号に再昇格、一九九三（H5）年四月からは岩内以遠を国道229号と重複し江差までを結んでいる。

滑降競技場施設とコースの整備

滑降コースの施設の概要は次のとおりである。

・男子コース↑スタート標高1126m、コース全長2636m、最大斜度37度（平均17度）

・女子コース↑スタート標高870m、コース全長2108m、最大斜度35度（平均14度）

・ロープウェイ及びチェアリフト

ロープウェイ↑工事着工 昭和43年7月上旬↑完成昭和45年1月下旬

3線交差式 乗車定員31人乗り 毎時330人の輸送

機械装置↑リアクトル制御方式 駆動装置は山麓において

第1区間884m、第2区間830m

チェアリフト↑チェアの数 58個、1.3m/Sの速度 毎時400人の輸送

リフト延長330m

着工 昭和44年9月上旬↑完成 昭和45年1月下旬

・建築施設関係 選手用建物（スタートハウス、ワックスルーム、選手控室）

競技運営建物（運営本部、駅舎、整備員宿泊棟等）

報道関係用建物（プレスセンター、放送ブース、調整室）



写真4 コースを造成する支援隊員
急斜面で飛雪を溜める雪柵用の
ブロックを運ぶ(1971年12月撮影)

選手、役員等の休憩室(中間ハウス、頂上ハウス)
 ・付属施設 会場内道路と照明設備 給水ポンプ及び濾過設備 自家発電設備
 ・その他の施設 ヘリポート(山麓、中間)各1ha(救急用ヘリコプター)
 電光掲示板(自動車にセットされている移動式)
 (『札幌オリンピック冬季大会資料集VOL2』「競技場施設の経緯」から)
 各種工事は苦小牧の岩倉組と岩倉組土建、ロープウェイ、チェアリフトに関しては滋賀県の安全索道が施工した。ロープウェイは各種工事の資材輸送に用いることから特に建設を急ぎ、一九六八年九月の起工式を待たずに厚生省の許可が下りると同時に着工され、完成がプレオリンピック直前だったことが工事期間からも読み取れる。
 滑降競技施設建設の総事業費は最終的に八億三千三百六十万二千円となり、競技施設整備事業費全体の九割を占める大規模なものとなった。
 『北海道大学低温科学研究所業績』第1228号に収録されている黒岩大輔の「第11回札幌オリンピック冬季大会における雪氷調査」は組織委員会の委嘱によって四年間にわたり調査を行ったまとめである。

「I. 恵庭岳滑降コースの雪」中、コースの整備状況の記述を一部引用したい(要約)。

I. 恵庭岳滑降コースの雪

1971年12月初め30~40cmの湿った雪が降って両コースの基礎づくりが始まった。しかし、そのあとしばらくの間雪がふらず、かためた雪が風でふきとばされ、場所によっては地面が露出した。コースの周辺の森のなかから30cm×40cm角の雪のブロックを運びそれを積み上げて一辺が2m×2mの矩形の柵をゴール付近では約1m、スタート付近では30cm位の高さでつくった。風が吹くと飛雪が柵のなかに落ちて溜る。溜った雪はすかさずふかためるわけである。

1972年1月中旬には雨さえふってかなりの雪がとけてしまった。裸地にはアルミニウム樋とスノーシューターで林のなかから雪を輸送して埋めなければならなかった。樋は2.1km、面積は4万7000㎡、雪の量は2万7100㎡に達し、スキーで平らにならされた。

1月29日~30日と2月2日~3日にかけて新雪があった。全コースから新雪約1万5600㎡を除かねばならなかった。

滑降競技コースの整備は札幌オリンピック支援集団の滑降競技支援隊(支援隊)の担当で、第七師団を主力とした第七特科連隊副連隊長石崎二佐以下三三四人で編成された。主要装備は輸送車両としてボンネット一七台、ジープ六台、ウエポンキャリア一台のほか60式3t雪上車三両が配属された。コース造りは支援隊員のスキー板とつば足の圧雪をもって行われ、雪上車もピステン代わりに活躍した。

支援隊は十二月七日に東千歳駐屯地で編成結団式を行い、翌日から現地に入り尽力した。コース整備にはスキー競技役員一〇数名も加わった。一月上旬からの樋とシューターによる集雪は苦難に満ちたものだったが、日

増しにコースとしての仕上がりをかせていった。

一月二十七日、コースはFISアルペン技術部の検査に合格した。伊のR・ブラットナーは「自衛隊員の人海戦術で見事なコースができた」と支隊の労苦を讃えた。二十八日には、これ以上望むべくもない完璧な状態のコースが選手団、報道機関にお披露目、二十九日からは全競技役員が集結しての大会準備と選手の本番に向けた試走が始まった。

男子公式練習初日の二月二日、六〇^セほどの降雪がありコース全体は支隊によって除雪されたが吹雪による視界不良のため公式練習は中止となった。

(1) ロープウェイ(索道) オリンピック号(搬器) のその後

札幌オリンピック終了後、索道施設一本は一九七三(S48)年から登別温泉ケーブルのぼりべつクマ牧場で運用されている。ゴンドラ(搬器)は一九九二(H4)年まで使われ、以降は山麓駐車場南東隅で物置となっている。係員によると「搬器の老朽化が著しく駅から見える二・五面をコンパネで目隠した。搬器以外の索道施設は餌などをクマ山に運ぶ貨物用となっている。温泉街から山麓駅までのチェアリフト(シングルリフト)もオリンピックで使った(恵庭山頂駅・男子スタート地点)というが、現在は休止中である」。なお、搬器の塗色は白地に窓枠周りが青とオリンピック当時のままであった。

(13・11・23現地訪問)

恵庭岳へのルート(II・湖畔・オコタン航路)

恵庭岳において滑降競技が開催されたのは一九七二(S47)年二月四日から七日までの四日間だった。この間、一般車両は支笏湖畔有料道路を含む道道札幌支笏湖線・支笏湖線の通行を午前十一時三十分から競技終了の一時間後まで禁止し、終日にわたって駐車禁止とした。通行できるのは選

手と大会役員の車両だけだった。理由は盤尻・オコタン間の道道支笏湖線の幅員の狭きにあった。

千歳市内からの大会観戦者は、午前九時四十五分の中央バス千歳ターミナル発のバスに乗車、十時二十四分に支笏湖畔バスターミナルに着いた(六日・二便増発)。湖畔からは支笏湖観光運輸の客船に乗船、午前十一時(六日・十一時十分)に出航、一五^キ・五〇分の航行でオコタンに着棧、徒歩一三分で会場に到着した。千歳市内からはバス賃百十円、船賃二百十円(片道)で二時間二〇分程度を要した。

船は四、五、七日は客船美笛丸(61進水、五五^ト、定員二二二)、六日はオリンピックのため前年五月に新造された客船えにわ丸(六八^ト、定員二〇〇)が用いられた。両船共に二五〇馬力の鋼船であった。当時、客船は道路事情から冬も湖畔と(ポロピナイ・丸駒温泉・グランドホテル経由)オコタン荘(後・グランドホテル新館)往復を二時間以上かけ周航していた。なお、湖上輸送のリハーサルはプレオリンピック時に、本番とほぼ同時刻の午前十時五十分湖畔出航の一日一往復で実施されていた。

オリンピック開催時、支笏湖観光運輸には客船として美笛丸、えにわ丸のほか、白銀丸(元・千歳鉱山所有、50進水、二〇^ト鋼船、定員三二)、みどり丸(元・菱中通船部所有二七^ト鋼船、定員八五)、第一樽前丸(七^ト木船、定員三二)の五隻のほか、快速艇一二隻が在籍していた。

札幌市内からの来場は、中央バス札幌ターミナルと北一条に設けられた臨時バスセンター発で一日片道一三便が唯一の手段だった。

千歳市内聖火リレー

聖火リレーの目的は道内各地にオリンピッククムードを盛り上げ、これを契機に冬季スポーツの振興を図ろうとするものであった。

オリンピックでの採火は一九七二（S46）年十二月二十八日、沖縄を經由し一九七二年元旦に羽田に到着した。翌日、国立競技場から国内聖火リレーが出発、甲府を經由し、その後は佐久、宇都宮經由東北本線と長野、新潟經由奥羽本線に沿うルートとし十九日に青森で集火した。二十日、聖火は津軽丸型鉄道連絡船大雪丸で津軽海峡を横断、海自護衛艦隊旗艦^照てるづき^月他四隻の護衛艦が警戒に就いた。函館に着いた聖火は、道内不定期航空会社横浜航空（名義・野崎産業）のセスナ402A型双発レシプロ機そよかぜ^他一機で釧路（道東コース）と稚内（道北コース）に空輸、函館（道南コース）とともに道内三コースで聖火リレーが開始された。

千歳を走り抜けるのは道東コースだった。コースは国道で、人家がないところでは聖火を車載した。釧路空港に着いた聖火は、釧路・根室・弟子屈・網走・北見・足寄・帯広を巡り、えりもからは太平洋を見ながら苦小牧に到着したのが二十七日、翌日は予備日となった。車列は無線車（パトカー）を先頭に先行車六台、その後パトカーに前後を守られたリレー隊車として聖火灯、点火灯を積んだ組織委員会などの六台が続いた。後行車としては担当区間を走り終えたリレー隊員を乗せるバスなどが走った。市街においてはリレー隊車列の前に聖火を掲げた正走者、予備トーチを担当する副走者二人、オリンピック旗を持った一〇人の随走者が走った。

聖火リレー最終日一月二十九日、苦小牧から千歳を経て恵庭に向かうリレー隊の動きを『札幌オリンピックピック冬季大会国内聖火リレー北海道実施要領』などにみると次のとおりである（受渡地点名＝ママ）。

出発時刻	受渡地点名	走行種別距離（キロメートル）
10時27分	明野ストア	車輻 21.9
11時04分	千歳市朝日8十字路①	走者 1.0（支庁境引継式典）
11分	中央バス千歳ターミナル②	走者 0.7

16分	千歳駅十字路③	走者 1.2
24分	昭石ガソリンスタンド④	走者 1.5
34分	サントリーウイスキー工場	車輻 4.2
43分	森永乳業KL	恵庭市へ引き継ぎ

- 正走者 正走者・副走者・随走者所属
- ① 稲川 勉（青葉中学校） 青葉中運動部員2年生
 - ② 広内 四郎（千歳中学校） 千歳中運動部員2・3年・卒業生
 - ③ 上山 勇治（千歳高等学校） 千歳高陸上競技部員
 - ④ 伊藤 孝志（陸自第11普通科連隊） 三部隊・東千歳7北千歳3空自3

受渡地点のうち、中央バス千歳ターミナルはホテルグランテラス千歳の向かいにあった。また、千歳駅十字路とは錦町十字街のことで、昭石ガソリンスタンドは現在の牛井チェーン店・すき家36号千歳店の位置にあった。当日は十時三十分まで広報車と消防望楼から聖火リレーの広報が行われ、沿道に集まった五〇〇〇人以上の市民に日の丸の小旗が配られた。各中継所には無線機が備えられ、救護員として医師と看護婦が配置されるなど万全が期された。

聖火リレーはリレー隊員、実行委員会のチームワークも良く定刻どおりに進んだ。時間帯はプレオリンピック時のリハーサルと同一、リレー隊員も他部隊に異動した自衛隊員五人と千歳高校から転校した一人を除いて同じだった。

聖火は千歳から恵庭、広島を経て午後二時過ぎ、札幌の道庁赤れんが庁舎前で三コース合同の到着式を行った。同じころ、千歳市民会館ではリレー隊の解散式が行われ組織委員会からの記念メダルが贈られた。また、トーチは各リレー隊に、ユニフォームは走者に記念品として渡された。

本稿執筆に当たり各隊トーチの保管状況を調べたところ、三部隊混成リ



写真5 男子滑降コースのフィニッシュ地点
女子のフィニッシュ地点は左方、コース上空にオリ
ンピック号が運行している

レー隊正走者が所属する第十一普通科連隊では、トーチを第七師団東千歳史料館に移管していた。史料館ではソチオリンピック冬季大会の開催が近いことと2020年東京オリンピック大会の開催が決定したことから、倉庫に分解格納されていたトーチを組み立て、車両用国旗（小旗）、ポスター類などとともにオリンピックコーナーを新設し展示している。青葉中学校、千歳中学校、千歳高校においては、校内に見当たらずに備品台帳にも記載がないことから残念ながら廃棄されたものと思われる。

滑降競技と聖火台

滑降競技 滑降競技日程は二月四日の本番を想定した女子ノンストップトレーニング（NST）から始まった。七日の男子本番までの四日間は晴天が続く、日程は『資料集VOL2』によると次のようであった（要約）。

- 四日 女子NST 午後1時31分～3時
 - 五日 女子滑降 午後1時30分～2時16分
 - （スイス、オーストリア、米など13カ国の41選手が滑降）
 - 六日 男子NST 午後1時31分～3時30分
 - 七日 男子滑降 午後1時30分～2時30分
 - （スイス、オーストリア、ノルウェーなど20カ国の55選手が滑降）
- 滑降競技は義務である三日間の

公式練習を経て一本のタイムで順位を競う。競技本番では一人の転倒者もなく順調に競技が進んだ結果、女子では約一五分、男子では一時間も早く日程を消化した。コースの万全性を示した結果であり、各関門に配置された支援隊員の最終整備の成果であった。

「第11回札幌オリンピック冬季大会における雪氷調査」に選手、役員の評価を見ると次のとおりである（要約）。

V. 第11回札幌オリンピック冬季大会の雪氷に対する選手、役員の評価

オリンピックアルペン競技技術顧問団のプラットナー氏及びスピース氏は1月21日～22日、整備中の恵庭岳滑降コース及び手稲山の回転コースを視察し、また、競技開始前日の各コースを点検し、オリンピック監督者会議の席上で人工的に処理されたスキーコースは大変良好であると公式にのべている。また競技レフェリーの一人は過去25年間のレースのうち最高のコースであると賞辞を送っている。謝辞を多分に含んでいたとはいえ、競技用として使用に耐えうるものであったことは確実である。しかし、選手の意見は、恵庭岳の滑降コースは別として手稲山回転コースの雪は少し柔らかすぎるというものが多かった。

審判、選手から excellent splendid perfect と絶賛された恵庭岳の滑降コースは、男女ともに出場選手全員が一人の転倒者もなくフィニッシュするという滑降競技史上まれな結果を残した。

表彰式は恵庭岳会場では行われなかった。女子は八日に手稲山女子大回転競技場運営本部（現存）で、男子は十日に真駒内屋内スケート競技場において執り行われた。なお、アルペン競技は女子滑降のほかは全て真駒内屋内スケート競技場において実施された。

恵庭岳滑降競技場聖火台 オリンピックと聖火には密接な関わりがあるが、全ての競技会場に聖火が点^{とも}ざされていたわけではない。聖火台は主競技



写真6 恵庭岳滑降競技場聖火分火台(完成予想図)
聖火台は女子滑降コースのフィニッシュ地点に建設された

会場である真駒内スピードスケート競技場のほか、手稲山と恵庭岳滑降競技場の三方所のみ設置された。真駒内の楕円球を半分にかットしたようなプロンズの聖火台は国際ロータリー第三五〇地区（北海道）が、手稲山のコンクリート斜柱が大空へ伸びるダイナミックな聖火台は八社からなる手稲山聖火台建設委員会から組織委員会に寄贈されたものだった。大倉山にも聖火台が建設される計画があったが具体化しなかった。

恵庭岳の聖火台は正しくは「恵庭岳滑降競技場聖火分火台」と呼ばれ、千歳市を中核にした恵庭岳聖火台建設協賛会が組織委員会に寄付したもので女子コースのフィニッシュ上に建てられた。建設に協賛したのは、地元千歳市のほか、隣接する苫小牧市と恵庭市、支笏湖と縁が深い王子製紙と三井観光開発、空港関連として航空三社（日本航空、全日本空輸（現・ANA）、東亜国内航空（後・日本エアシステム・消滅））、北海道空港とそのテナント会・北海道空港振興会の一〇団体であった。協賛金は建設オリンピック後の移築費用を含め一〇〇〇万円といわれる。

聖火台は細い四角柱の上に褐色の矩形鋼板をつなぎ合わせ逆円錐状に二

重にした形状で、約八メートルの高さだった。一九七一年十一月八日に工事着手、十二月二十五日に完成式と贈呈式が行われた。開会式当日の二月三日に真駒内から分火され競技最終日の七日までの間、恵庭岳山麓に日輪の火が赫奕と燃え上がり選手の士気を大いに鼓舞した。

聖火台のその後について当時の複数の関係者は、「聖火台は一九七二年七月に組織委員会から返還され千歳市に寄贈されたが、一九七八（S53）年自然の村閉鎖当初は清掃事業所内に分解格納し、その後はスポーツセンターに収納された」という。なお、真駒内と手稲山の聖火台は今も現地に見られる。また、競技会場とは別に札幌市役所（71建）の大通側にも特設聖火台が設けられ、一月三十日に大通西8丁目広場で集火された道内三コースの聖火が開会式当日まで燃えた（現存：札幌市役所前聖火台広場）。

千歳市内のオリンピックムード

歓迎の旗・記念塔と掲示 札幌オリンピック参加のため海外からの直行便、チャーター機を迎え入れる千歳空港は、一九七二年（S47）年一月七日のカナダ空軍機の飛来で臨時国際空港のスタートを切った。大会期間中、選手、役員、報道機関を乗せた直行便は入国便一七機、出国便一〇機のほか、国内線が参加三五カ国の選手団を輸送した。

組織委員会は外国選手団が北海道における第一歩を記す千歳空港ターミナルビル前に、一月十日から日章旗、オリンピック旗、札幌市旗と海外三四カ国の国旗がアルファベット順に高さ一〇メートルほどのポールに掲揚された。また、上部三面に正方形の中に日の丸、雪の結晶、五輪+SAPPORO '72を連ねたシンボルマーク（表紙・小型切手シート参照）を描いた千歳空港の札幌オリンピック記念塔は夜間にはライトアップされ雪に映えた。記念塔は高さが一〇メートル、正方形柱と不等辺三角柱を組み合わせた変形五角柱の

巨大なものだった。旗の波と記念塔は空港利用者や国道を行く人々にオリンピックをアピールした。

また、千歳市も空港の参加国国旗掲揚に先立ち年末に歓迎塔を設置した。歓迎塔は高さが七層ほどの四角柱で、正面にシンボルマークが描かれ、オリンピックカラーである青、黄、緑、赤のラインを縦に入れた。国道沿いの錦町十字街と朝日町八丁目、道道千歳インター線には開校を元日に控えた真町中学校（現・道千歳高等支援学校）前に設置した。

さらに、朝日町八丁目の丸善石油・北日本石油千歳給油所（現・コスモ石油・北日本石油千歳空港SS）では、車で札幌に向かう選手団がガソリンスタンドの前を通過することから休憩室の窓いっぱいにはシンボルマークとYOKOSOを描き、開催地市民として遠来の客を歓迎した。

一月十八日には千歳市役所庁舎屋上（旧庁舎／現・総合福祉センター）に幅三五層の巨大看板「札幌オリンピック冬季大会・シンボルマーク・ようこそ 世界はひとつ」が掲げられるとともにオリンピック旗が翻った。

これらのオリンピック旗や歓迎看板は道行く市民に目前に迫ったオリンピックのムードを高揚させた。

千歳市総務課オリンピック係 オリンピック関係事務は一九七二年オリンピック冬季大会が札幌に決定する以前から企画課が所管していたが、プレオリンピックを翌年に控えた一九七〇（S45）年九月の組織改正で総務課にオリンピック係を新設した。所掌事務はオリンピック関係団体との連絡調整などとした。オリンピックを目前に控えた一九七一年の十二月には庁内業務の円滑な連絡調整と各機関との連絡体制強化のため札幌オリンピック冬季大会業務連絡協議会を立ち上げた。東峯助役が議長、各部長等が構成員となった。オリンピック係の広範な事務が、教育委員会など関係部局を取り込むことで連携が密になった。

また、千歳市は組織委員会からの要請によって各種備品買出しのほか、一九七二年一月中旬から二月中旬までの間、職員を派遣し大会運営に協力した。内訳は千歳空港事務所に七人、滑降競技会場事務所に三人、防火警備員として一日五人の消防職員、競技役員として九人のほか、十二月からの搬器運転要員五人で総数二九人に及んだ。

オリンピック市民の集い 「オリンピック市民の集い」は、市民と来千した多くの観光客にオリンピックを楽しんでもらおうと開催されたミニ雪まつりでオリンピック開催期間中の二月五日に開催された。

オリンピック市民の集いは、一九六六（S41）年から続く千歳氷上カーニバル大会を衣替えしたものだ。一九七一年一月に千歳中学校特設リンクで開催された第六回大会には、オリンピック開会式において聖火スクーターイングランナーとなった全道フィギュアスケート大会中学チャンピオンの辻村いづみが模範演技を披露した。

オリンピック市民の集いの会場となった市営工場団地特設会場は、第二工場団地内で一九六六年に伊藤ハム栄養食品が立地したが一九七〇年に解約となった工場用地（79↓キリンビール北海道千歳工場用地）で、砂利道の第二停車場線（現・中央大通）を挟んでサントリー千歳プラントが操業（67〜06）していた。

雪像は宇治の平等院鳳凰堂で幅三〇層、高さ一〇層、奥行き一〇層と大きなもので、制作は陸自第一特科団第一特科群隊員延べ一七〇〇人が動員された。サントリーでは従業員が高さ五層の雪のジャンボウイスキー「サントリーオールド」を工場敷地内に作った。当時、オールドは「ダルマ」と愛称された70年代人気の高級ウイスキーで、サテライトの千歳プラントからも主力商品として瓶詰出荷されていた。

本番当日は午前十一時に開場、市役所軽音楽バンドのブルーススターズ、

千歳市民合唱団、陸自幌別駐屯地北海自衛太鼓、SPG（サントリー・パブリシテイ・ガールズ）のアトラクション、日が暮れてからは氷上カーニバル当時から恒例の雪中花火大会が行われた。中央バスの臨時便も運行され、多くの市民で賑わった会場には「虹と雪のバラード」が流れオリンピッククムードはいやがうえにも盛り上がった。

氷上カーニバルは、一九六五年一月に札幌招致委員会が第11回オリンピック冬季大会誘致申請書をJOCに提出したことを受け第一回が開催され、札幌オリンピックとともに開催された市民の集いを以て終焉を迎えた。氷上カーニバルはオリンピッククムードを盛り上げるための徒花だった。以降、市街において冬の市民参加型スポーツイベントは行われていない。

支笏湖自然の村

支笏湖自然の村（自然の村）とは、札幌オリンピック冬季大会記念事業として残存施設を活用し青少年に自然と接する機会を与えようとした千歳市営の教育施設であった。

開村は、滑降競技会場について「大会終了後は、施設を撤去するとともに、伐採跡地には、早急に従来の林相を回復し得るような方法で植林すること」という環境庁の既定方針に抗したもので、札幌営林局の用地使用と環境庁の施設工作の許可が下りたのは一九七四（S49）年の八月になってからだった。

オリンピックの残存施設は整備員宿舎（A棟五〇三平方メートル・宿泊室（五〇人）、食堂）、サブプレセンター（B棟六三八平方メートル・宿泊室（八〇人））、運営本部（C棟八八四平方メートル・食堂、炊事室）の三棟だったが、三棟ともに林相復原を考慮した簡易なプレハブ構造だった。A棟は女子ゴールのオコタンペ川方、B・C棟は女子フィニッシュ上手でC棟の横には

自然の村のシンボル、発火装置をはずした聖火台があった。

千歳市が自然保護団体の開村反対を押し切り施設をオープンさせた理由については疑問が残る。当時、支笏湖周辺には一九五五（S30）年に日本ユースホステル協会が直営第一号として開設した支笏湖ユースホステルのほか、市所管で一九六九年開設の青年の家支笏湖青少年研修センター（05閉所）、一九七四年開設の支笏湖勤労青少年フレンドシップセンター（03閉所）のほかモラップキャンプ場（50開設）、ポロピナイキャンプ場（61開設）などの青少年を対象とした宿泊施設があった。さらに、支笏湖温泉街には支笏湖畔国民休暇村（現・休暇村支笏湖／77開業）の建設も予定されていた。支笏湖周辺の青少年施設は明らかに供給過剰にあり、交通の便に恵まれないオコタンに青少年を集めるには困難が伴うことは容易に想像できた。真の狙いは将来的なオコタンの観光開発だったのであろう。

自然の村の開村は一九七五（S50）年六月、施設の周辺に自然の林相を崩すサクラを植樹するなど自然保護団体との軋轢を残したまま開村となった。利用期間は六月から九月末までの四カ月間で宿泊定員は一三〇人、食事は持ち込み食材による自炊で食器と寝具を貸与した。市は期間中一万人以上の来村を見込んでいた。来村者の交通手段として初年度は市役所・自然の村間五〇^キを退役した老朽スクールバスで送迎したが、翌年度には運行が不能となって代替措置を取らざるを得なくなった。

開村にあたって環境庁から認められたのは耐用年数内の施設の利用だけで国立公園特別地域内ということから植物や昆虫の採集にも厳しい規制があり、利用人員も二八〇〇人、一三〇〇人、三年目の一九七七年はA棟のみの開放で八六二人と年を追うごとにじり貧となった。三年目の九月には施設の老朽化と財政事情から廃村の方針を固めざるを得なかった。

競技会場建設の許可条件である林相復原を押し切ってまで開村したが事

前評価が甘かったのか、初期投資、運転経費、解体・復原費用あわせて一億円近い金額を費やし三年という短期間で頓挫した。一九七八（S53）年三月に廃村、七月から八月にかけて施設を解体、翌年に復原植栽を行った。

オリンピック当時からの自家発電装置建屋は、オコタンペ川右岸・道道支笏湖線から自然の村に向かう橋のたもとにあった。当時在職した市ガス水道局職員によると、一九七九（S54）年に一基当たり高圧六六〇〇ボルトの発電機は廃村にあたってリユースするため、製造元の三菱電機でオーバーホールされガス水道局の施設に転用された。一基はガス工場全体の非常用電源として、一基は蘭越浄水場に設置され泉沢への新設水道三・三キロの山越え圧送用電源に使われた（97ガス事業譲渡↓北海道ガス）。

野ざらしのオリンピック顕彰碑

一九八六（S61）年十月、『朝日新聞』は「札幌オリンピック滑降競技入賞者顕彰碑が恵庭岳山中に野ざらし状態で放置されている。日本体育協会は札幌市の『冬のスポーツ博物館』への移設計画を打ち出した」と報じた。現地調査を行ったのは組織委員会の事務を引き継いだ日本体育協会（日



写真7 野ざらしのオリンピック顕彰碑
シンボルマークのプレートが持ち去られている
(1986年10月撮影：先田次雄)

体協)の総務部長一行だった。日体協としては碑の維持管理は地元との先入観があつたのか。一般的な競技会場であればオリンピック開催のシンボルとして大切

にするであろうが、滑降会場は復原中の林野であった。

顕彰碑は「冬季祭典のモニュメント」として温かく見守られなければならないものだったが、滑降コースの復原工事が始まろうとしていた現地に碑を設置したのはどのような理由からだつたのだろうか。恵庭岳と同様な事例がほかにもある。クロスカントリースキーとライフル射撃を組み合わせたバイアスロンが行われた陸自北海道大演習場西岡地区内・西岡距離競技場の碑も、防衛庁用地に立ち入り禁止ということから市民が碑を目にすることができない地となっていた。

恵庭岳の顕彰碑は縦横一・二メートルの白御影石の台座に一辺四方の黒御影石の銘板を取り付けたもので、銘板には滑降競技男女の一位から六位までの入賞者名と国名三文字コードが刻まれていた（84ロサンゼルスオリンピックくゝ八位まで）。日体協の現地調査時点において銘板のシンボルマークのプレートは失われ、縁も欠けている状態だつた。碑は設置から一四年が経ちクマザサに覆われていた。放置が明らかになってから千歳市教育委員会体育課は、日体協、道体協、札幌市を訪れ所有権と管理責任がどこにあるのかを調査したが、はつきりしたことは分からずじまいだつた。

千歳市は移転先として「開催地である千歳への移転を考慮したい」と口頭で日体協に申し入れるとともに、受け入れ先として有力視されている札幌市の意向を打診した。その後、日体協に文書で「移転先として青葉公園の百年記念塔付近を考えている」と伝えたが、市立図書館（88開館）の建設中で場所については未定とした。

年が明けて日体協との協議の結果、顕彰碑を青葉公園に移設することで合意、三月には千歳移転が正式に決まったという文書が来簡した。恵庭岳山麓の雪解けを待つて市教委職員が建設業者とともに碑を市内へ搬出した。

顕彰碑は当初、青葉公園に新たな台座を作り公開することを考えた。し

かし、検討の結果、十月にはスポーツセンター（78開館）一階ホール・アリーナ入口の壁に銘板が取り付けられた。スポーツセンター内であれば、いたずらによって壊される恐れがないことが最大の理由だった。

銘板の設置にあたって失われたシンボルマークプレートのリプリカ作成を日体協では判断できず、最終的にはJOCからIOCにお伺いをたてたという。また、欠けていた銘板の縁は形を整えるため切りそろえられたためひと回り小さくなってしまった。

放置問題が公になってから一年、銘板は安住の地を得た。なお、バイアスロンの顕彰碑は時を同じくして札幌中島公園内の冬のスポーツ博物館に移設された。

おわりに

恵庭岳滑降競技場の復原について、1956年伊コルティナダンペッツオオリンピック冬季大会と1958年アルペンスキー世界選手権大会でアルペンスキー滑降、回転、大回転で金メダルを獲ったオーストリアアナシヨナルチーム監督トニー・ザイラーと、1968年オリンピック冬季大会を開催した仏グルノーブル市長デュブドウの言葉、オリンピックが終わって四カ月後に開催された第六八国会、衆議院公害対策並びに環境保全特別委員会における島本虎三委員の質問に対する大石武一環境庁長官の答弁を本稿の終わりに引用したい。大石は四日市ぜんそく事件、尾瀬自動車道建設中止、水俣病患者認定など毅然とした対応で知られる。

『自然の美しさは金にはかえられない。一般に開放するにはコースが狭すぎ
る。自然を守る決意は立派だね』（トニー・ザイラー）

『スポーツよりも自然、生活環境を守ることが大事、参考にしたい』（デュ
ブドウ・グルノーブル市長）

巨費を投じた会場にあつさり見切りをつける「いさぎよさ」に、外国人はおほめのことばを残して去った。経済大国への皮肉がちよっぴり。

（男子滑降翌日二月八日付『北海道新聞』朝刊スポーツ面「エニワの感傷」）

○島本委員（略）札幌の冬季オリンピック大会、これは偉大なる成功裏に終わりました。しかし、終わる条件として、自然の保護だけは完全にさせなければならぬ（略）この復旧計画はどうなっていますか。もう実施されてご
ざいますか。

○大石国務大臣 わずか三日か四日の滑降レースのために、あの貴重な恵庭岳の自然を破壊したということは、私は残念に思います。たとえどのような、オリンピックであろうと、大義名分とかにしきの御旗がありましても、あの自然を破壊したということは、私はいま非常に残念に思います。しかしそうきまつたことはしかたがありません。それは当時のいろいろな自然保護関係の人が懸命の努力をしてあのような復旧計画を約束して認めたというところに私はその努力のあとを感じるわけでございます。御承知のように、あの競技が終わりました翌日からすでに設備が取り払われております。（略）

（一九七二年六月十三日『衆議院会議録情報』）



写真8 市内唯一のオリンピックの記憶・顕彰碑
滑降では男子がB・ルッシ(ソチ滑降コース設計)、女子は慧星マリー=T・ナディヒが金メダル、ともにスイスであった(2014年11月・森谷淳二撮影)



写真9 中央バス・札幌オリンピック冬季大会記念乗車券(×0.8)
 女子N S Tから男子滑降競技までの4日間、1日13往復の連絡バスが運行された。うち上り4便が北1条を經由、全便およそ70分で中央バス札幌ターミナルと恵庭岳会場を結んだ。中央バスはオリンピック期間中、全社の貸切車と一部路線車を札幌に集結させ、特別体制を敷いて会場輸送任務を達成した。なお、本券は中央バス初の記念乗車券である。

参考文献

- 千歳市編纂文書『41札幌オリンピック関係』綴 昭和四十一年ほか
 札幌オリンピック冬季大会組織委員会『札幌オリンピック冬季大会資料集VOL
 1・2』／『第11回オリンピック冬季大会公式報告書』 昭和四十七年
 札幌市『1968年オリンピック冬季大会札幌招致の追加資料』 昭和三十六年



(参考) 北海道放送のオリンピック記念スタンプ



(参考) 男子滑降競技プログラム
 大きさはB列5判

第10回オリンピック冬季大会札幌招致委員会『招致委員会書類綴』 昭和三十八年

第11回冬季オリンピック札幌大会滑降競技プログラム(2/7)

黒岩大輔「第11回札幌オリンピック冬季大会における雪氷調査」『北海道大学

低温科学研究所業績』第1228号 昭和四十七年

千歳市『躍進千歳の姿』 昭和二十四年／『千歳市史』 昭和四十四年／『新千

歳市史』 平成二十二年／『要覧ちとせ』各号／『広報ちとせ』各号

札幌開発建設部『市道支笏湖周辺道路新設工事概要』 昭和四十三年

苫小牧市『苫小牧市史』 昭和五十一年

札幌市『新札幌市史』 平成十四年

恵庭市『恵庭市史』 昭和五十四年

国立国会図書館 国会会議録検索システム

北海道道路史調査会『北海道道路史Ⅰ・Ⅱ』 平成二年

Shear.com WEBサイト「オリンピック号(恵庭岳)」『失われたロープウェイ

イ』 平成二十一年

丸駒温泉『原始の森と湖に…支笏湖丸駒温泉旅館80年』 平成七年

高橋長助『国立公園支笏湖沿革史』 昭和四十七年

『千歳民報』／『北海道新聞』／『毎日新聞』／『朝日新聞』

協力

札幌ウィンタースポーツミュージアム／陸自第七師団東千歳史料館／千歳市教

育委員会／北海道千歳高等学校／インターネット航空雑誌『ヒコーキ雲』佐伯邦

昭／原智浩／先田次雄／佐々木拓人／村上和敏ほか多くの関係者の皆さん

写真協力 先田次雄／森谷淳二／前田克利

レファレンス 千歳市立図書館／富良野市立図書館

機関誌『志古津』第19号共通地図(1)

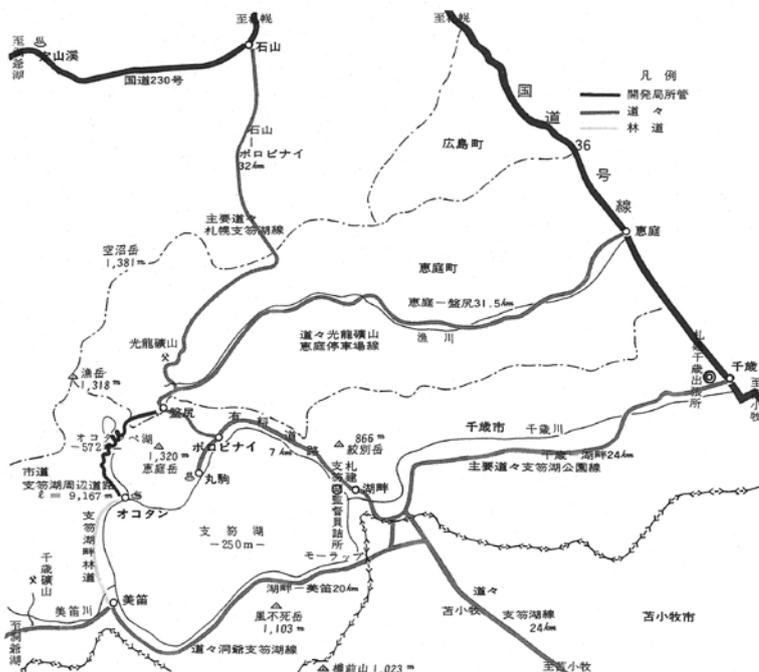


図1 札幌開発建設部『市道支笏湖周辺道路新設工事概要』掲載図 1968年当時の道路名となっている